

其子民部來會す。予神前に於て一首を詠じ、短冊に書て獻之。
ものゝふのたのむ八幡のみしめ繩長く弓矢の道守りませ
其後義仲の願書並其時奉納の上刺所所望し拜見之。依て又
青銅百疋引之。

六日。歸宿。

故郷の草のいほりのうれしさに今も旅ねの心地こそすれ
ながらへて又きくべしと思ひきや枕に馴し軒のまつかぜ
夏草の枕の窓をとぢつれば旅ならぬ床もつゆぞこぼるゝ
一、草堂を建てゝ觀月亭と號す

二十八日予庭際に方丈の艸屋一軒建之。年來如此の宿望た
りといへ共、未遂其志。此度歸宿の後頼催之。是後間暇の
夕殊に安坐し宜觀花月之爲也。所詮世上の有様をうかゞ
ひ見るに、物皆變化して不安閑、不足_レ以_レ今日計明日也。
然は一夕も安閑にして時を可_レ感觀こそ、せめての思出な
るべし。且高光の詠ざるかくばかりの詠什不堪感吟、依此
草堂を自號觀月亭とす。猶功成の後可_レ記意趣也。

一、當春御城下大火の事

晦日。當春御城下大火の事に付、永井傳七正良語て云。去

冬今春當地雪不降事は希有之事也。冬以來一尺斗も降候て
も、無程消申候。寛永十六年頃かゝる事有之よし。

みそぎ川夕風すゞし夏ころも一重ばかりに秋の來ぬれば
一、七月朔

小笹原そよとや秋をしら露のひかりも涼しけさのはつ風
一、大西金右衛門の事

頃日大西金右衛門大坂陣の時分子孫有之候哉御尋、當番組頭山
崎半左衛門奉之、九里覺右衛門入道夕庵・淺井源右衛門政右
等へ相尋候處、金右衛門事は承及候得共、子孫は斷絶と承
候迄にて覺悟無之候。有澤九八郎へ相尋候處、九八郎高岡
に罷在候時分、金右衛門使立候家來足輕に罷成有之、常々
金右衛門事申候。其足輕語候は、金右衛門元は信長公に奉
仕、本能寺にて御生害、其後高德公より浪人分にて是非可
罷越旨、強て御招に付參上仕、千石拜領す。瑞龍公御冑の
御立物被仰付候て、各拜見被仰付候處、新參衆の内伊藤權
右衛門と申者、此御立物は不宜旨申候。其儀以外の外御立腹
被遊、既御手討可被遊射に付、金右衛門奉留之、其内伊藤
は立退直に他國仕候。其後金右衛門を御叱被成候處、御口

答仕候に付是又御怒被遊候を、御側の面々金右衛門を爲退

候。其翌日金右衛門押て登城仕候處、折節御鷹野へ御出被
遊御覽被成、御機嫌不宜御様子に候。何と被思召候哉、御
脚半の紐を二三度御直被成、扱金右見事々々と御意被成候。
其後何篇となく御奉公仕候。左れども右の儀有之故か、立
身も無之候。實子無之、養子は願申間敷との覺悟にて、跡目
斷絶のよし申候。其足輕も十四年前相果申由也。則言上。

一、七夕小雨

曙の河瀬の浪のたちかへるころも手いかにほし合のそら
戀渡る紅葉の橋に雨すぎたなばたひめや袖ぬらすらん
一、几帳二基到着す

十三日内々出納豊後守・平田内匠允へ被命所の、几帳二基
出來に付到來、三尺几帳は號本殿几帳、帷白地に以_レ白粉畫
あり。四尺几帳は號私几帳、白綾地に花鳥の繪彩色也。

一、山本惟明へ

比日惟明が許より閑亭の營如何候哉、獨居のみに候はんま
ゝ、夜の錦かと申越候。依之及左之一首畢。

ひとりすむ宿こそ月も哀れなれ心の花のあだにちらねば

一、野田山の墓に詣てて
十六日寅刻、揚鞭到野田山、拜先考先妣之墓所。折から雨
灑て双袖をうるほす。依て二首を詠。

さらでだに袂しほるゝ秋風にまた露わくる艸のしたかけ
なき跡をしのお涙にくらされて袖に知られぬ秋の雨かな
建そへしそとば新に見ゆれども名は古にける跡ぞ悲しき
一、光英へ返りごと

二十六日。光英が許より尋ね侍りしまゝ。

もろともに涙くもらで七夕のあふ夜や月の秋も知るらん
天雲のよそにおもふもくるしきはやゝ明初る星合のそら
空だきの煙の末やほし合の夜半に消えゆく秋のうきくも
天の河紅葉の橋も中絶えて今朝はむなく風わたらん
一、觀月亭の額

觀月亭額、光嚴寺普門能書に付、望之ければ染筆あり。爲
謝禮短冊一葉に書て送り侍る。

水くきの跡にうつせる月影は後の闇路もなほや照らさむ
一、卯辰八幡への獻詠

十五日卯辰山八幡の社へ參詣す。先於淺野川放_レ小魚畢、